

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	和歌山県
-------	------

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	御坊市立藤田小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	2	1	2	2	2		10	18
児童数	33	43	28	44	36	43		227	

研究の概要

1. 研究主題

わかる！できる！楽しい！算数の授業をめざして
 一人に応じ、個を生かすきめ細かな学習指導を通してー

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・全学年・算数科

本校では、平成7年度よりチームティーチングを導入し、算数科を中心として複数教員による授業形態の研究に取り組んできた。そして、平成9年度から加配教員が配置され、主に算数を中心に理科、社会、総合的な学習などでTTの形態による個に応じたきめ細かい指導、児童の興味・関心に応じる指導など、指導方法の工夫・改善を図ってきた。

平成12～13年度は、第4学年以上のすべての算数の時間で複数教員が指導する形態をとってきたが、平成14年度は、その体制を第2学年以上のすべての算数の時間に拡大した。それは、第3・第4学年の中学年においては、学習内容が具体から抽象へと質的に変わり、理解の程度に個人差が目立ち始める時期であるため、その前段からきめ細かい指導によるつまずきの早期発見と早期指導により、基礎・基本の確実な定着を図るとともに、分かる喜びを体感し、学習意欲の向上に努めたいと考えたからである。授業形態においても一般的なTTのほか、TTを生かした少人数なども取り入れ、指導方法の工夫改善を図ってきた。

平成15年度もこの研究を継続し、更に深めたいと考え、全学年を対象に「わかる！できる！楽しい！算数の授業をめざして」の研究主題を設定し、学力向上フロンティア事業の研究主題とした。全学年の算数のすべての時間に複数教員によるきめ細かい指導を導入することによって、「すべての児童に基礎学力を身につけさせる」という本校の教育課題の解決に取り組んでいこうと考えたからである。

(2) 年次ごと計画

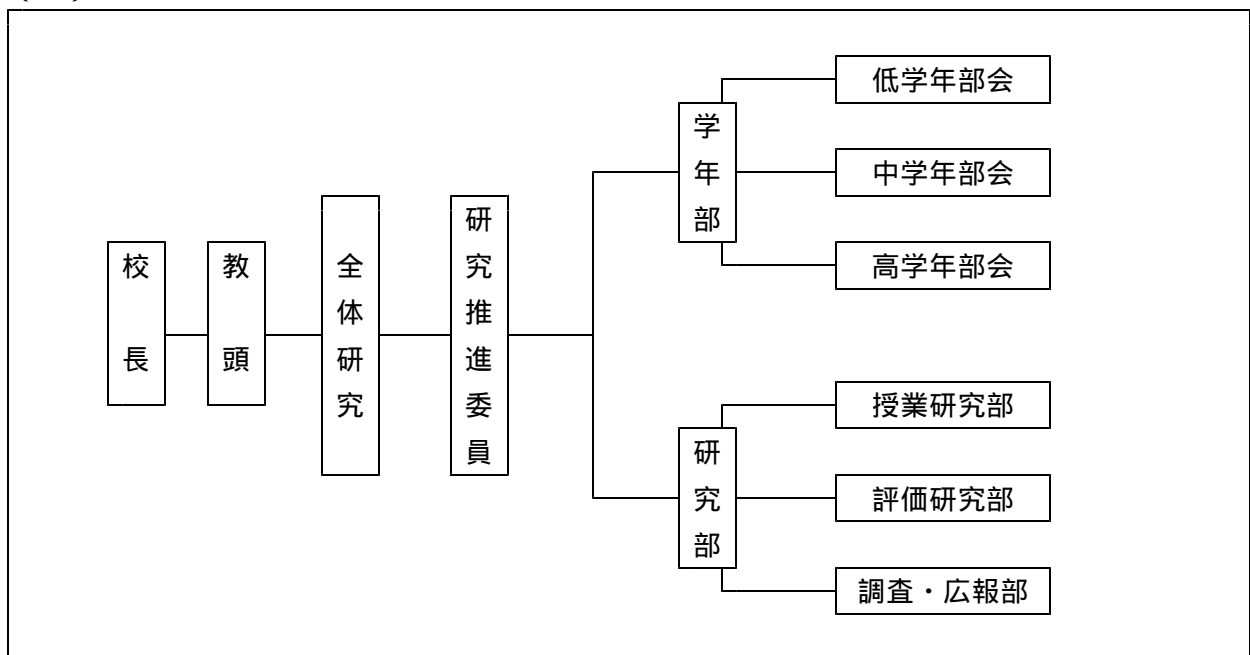
テーマ	「わかる！できる！楽しい！算数の授業をめざして 一人に応じ、個を生かすきめ細かな学習指導を通してー」
-----	---

平成15年度	<p>研究の見通し</p> <p>個に応じ、個を生かすきめ細かな指導方法や指導形態などを工夫・改善することで、児童一人ひとりに確かな学力が付き、自信や意欲をもって生き生きと学習する子どもが育つであろうと考える。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>多様な指導方法を取り入れ、授業の質的な向上を図ることによって、児童の学習意欲を高め、確かな学力を身につけさせるための指導方法の工夫改善について研究を進める</p> <p>個に応じた指導を図るための指導方法・指導形態の工夫・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ T T 指導、コース別学習など個に応じた指導の工夫・開発 ・ 発展的な学習や補足的な学習など、指導教材の開発 <p>基礎・基本の定着を図る学習指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎的・基本的な知識・技能の定着はもとより、数学的な考え方を重視した学習過程の工夫 ・ 個々のつまずきの分析とそれに対する手だてと支援のあり方 ・ 「基礎学タイム」の充実 <p>評価を生かした指導の工夫・改善（指導と評価の一体化）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 目標に準拠した評価規準を作成し、各単元における評価計画を立てる。 ・ 評価方法・評価内容の工夫・改善 ・ 形成的な評価や自己評価などの生かし方 ・ 研究データの収集・分析 <p>学習環境の整備・充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数コーナー（教室） ・ 教材・教具の充実 ・ 学習集団づくり ・ 算数ファイル（学習プリントなどの整理）・ポートフォリオ <p>研究成果の普及、他校との情報交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ふじよし新聞、学校だより、学級通信、授業参観 ・ 授業研究会などの開催 ・ ホームページ ・ 新聞報道など
--------	---

平成	<p>テーマ</p> <p>「わかる！できる！楽しい！算数の授業をめざして 一個に応じ、個を生かすきめ細かな学習指導を通してー」</p> <p>研究の見通し</p> <p>個に応じ、個を生かすきめ細かな指導方法や指導形態などを工夫・改善することで、児童一人ひとりに確かな学力が付き、自信や意欲をもって生き生きと学習する子どもが育つであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p>
----	---

16 年 度	<p>多様な指導方法を取り入れ、授業の質的な向上を図ることによって、児童の学習意欲を高め、確かな学力を身につけさせるための指導方法の工夫改善について研究を進める</p> <p>個に応じた指導を図るための指導方法・指導形態の工夫・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ T T 指導、コース別学習など個に応じた指導の工夫・開発 ・ 発展的な学習や補足的な学習など、指導教材の開発 <p>基礎・基本の定着を図る学習指導の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎的・基本的な知識・技能の定着や数学的な考えを育てる学習過程の工夫 ・ 個に応じたつまづきなどへの支援・手だてのあり方 ・ 基礎学タイムの充実 <p>評価を生かした指導の工夫・改善（指導と評価の一体化）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 目標に準拠した評価規準を作成し、各単元における評価計画を立てる。 ・ 評価方法・評価内容の工夫・改善 ・ 形成的な評価や自己評価などの生かし方 ・ 研究データの収集・分析 <p>学習環境の整備・充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数コーナー（教室） ・ 教材・教具の充実 ・ 学習集団づくり ・ 算数ファイル（学習プリントなどの整理）・ポートフォリオ <p>研究成果の普及、他校との情報交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ふじよし新聞、学校だより、学級通信、授業参観 ・ 授業研究会などの開催 ・ ホームページ ・ 新聞報道など
--------------	--

（ 3 ） 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

指導方法の工夫改善では、平成7年度から実施しているTT指導をより一層豊かなものにしてきたことにより、学習意欲が高まり学習内容の定着が図られてきた。その豊かな内容とは二人の指導者が「主と副」という固定した立場で授業に望むのではなく、二人が毎時毎時の指導者としての自覚のもとに、教材研究、教材の開発、児童への指導・支援を図ってきていることである。

例えば、指導形態においては、その時間のリーダーはきめているが、1時間内においても指導者の立つ位置や机間指導、機会をとらえての発問や説明など、子どもたちの理解や思考を促すための役割を綿密に打ち合わせし、指導に生かしてきた。

また、コース別学習による、少人数指導においては、児童自らがコースを選択することにより、主体的・意欲的に学習に取り組むようになってきている。児童の感想として、5・6年生では、「おもしろい」「よかった」という意見が出され、一人として「いや」という声が出ない状況になっている。

半具体物のタイル使用や図を使って自らの考え方を話し合う授業など、児童が理解しやすいための教材・教具の使用及び教材提示の工夫により、一人ひとりの理解や思考を高めることが徐々にできてきた。

また、個に応じた指導については、コース選択学習を取り入れることにより、少しでも個々の持つ力で問題解決をする方法を取り入れることで「確かな学力」をつける小さな一歩を踏み出したと考える。

新しい単元に入るまでにレディネステストを実施することにより、児童の到達点が把握でき、理解が不十分な児童に対して、導入までに手だてを施す中で、新しい学びへのスタートラインを作ることができた。

子どもたちは、過去に学んだ内容を基礎とし、新たな内容を獲得していく。しかし、過去の学びの中で、すべての子どもたちが「おおむね満足」の状況に至らない場合もある。また、その時点で全員が「おおむね満足」の状況であったとしても、時間の経過と共に学力の剥落状態が生じてくる。そのことは、案外子ども自身も自覚しないままに進むことが多い。レディネステストをすることにより、教師が子どもたちをとらえると共に、子ども自身が今の到達を自覚できるのである。この結果に対する手だてとして、「0次」としての位置づけをしている「基礎学タイム」の時間や放課後指導等、単元時数外の位置づけと役割を明らかにし、計画・実施してきたことである。

評価規準に基づいて毎時の評価計画を作成し、授業を進めることにより、ねらいをはっきりと定めて授業を進めることができた。また、「指導と評価の一体化」を図るため、毎時の評価を行うことにより、どのような手だてを誰にどのように打てばよいかを客観的なデータに基づいて考えることができた。特に、チームティーチングの二人指導においては、評価の方法や基準について、意思統一が必要なだけに、客観的データは重要であると考えた。

教職員全体が積極的に研修会に参加したり、参考文献で学ぶなど、学年・研究部会での協議や独習により、研究に対する意識・意欲が高まった。このことは、児童にも大きく影響し意欲にもつながっていると思われる。

2. 今後の課題

研究体制及び研究の進め方については、それぞれの研究部会や学年部会の役割分担や研究内容をはっきりさせて取り組んでいくことが大切だと考える。

学年部会で主になって取り組む授業研究において、授業研究部会・評価研究部会・調査広報部会の三部会が、どのような形で関わっていくことができるのか、どのように三部会の研究内容や成果を授業研究に生かしていくのかは、研究を発展・向上させていく上で極めて重要であるだけにさらなる検討が必要である。

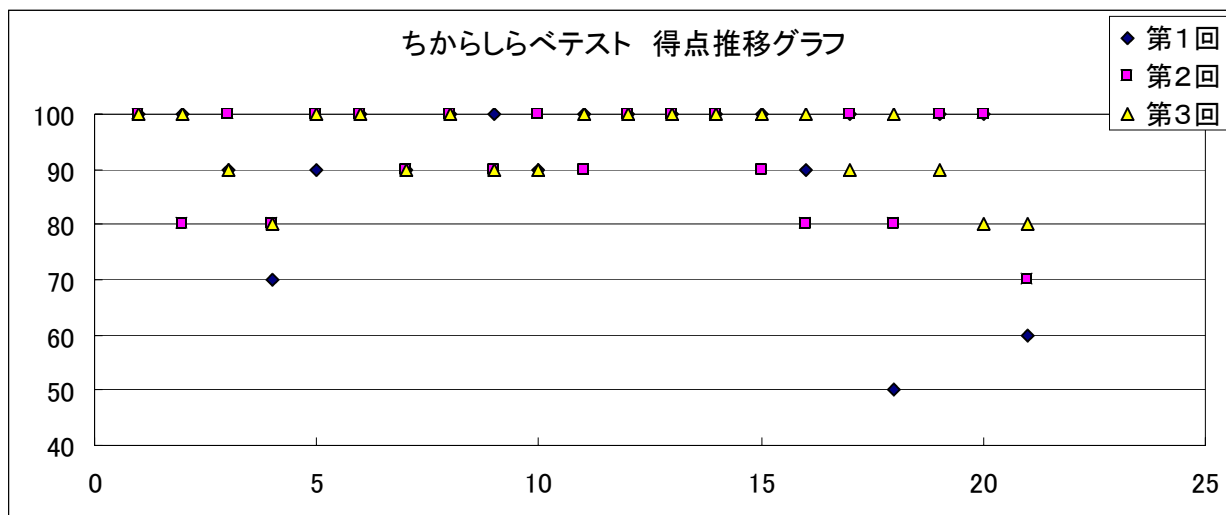
評価の仕方や習熟度別学習のとらえ方など、現職教育等で学び合ったことを実践化していく際、一人ひとりの把握の仕方には微妙に違いが生じてくることがある。共通理解しあったことは、必ず文章化し、全体で取り組みを進めていくことが大切である。

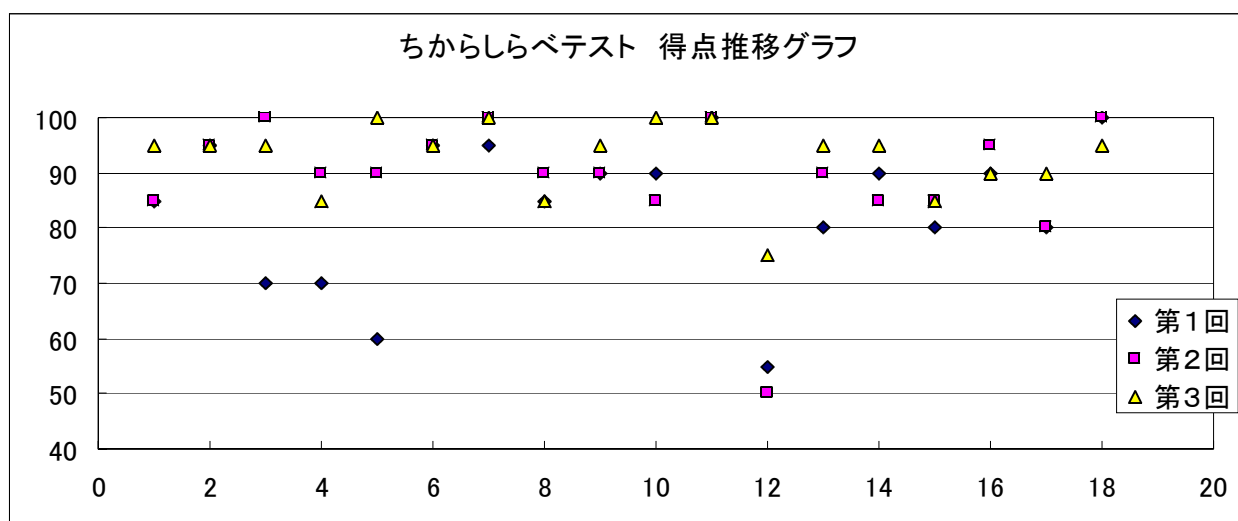
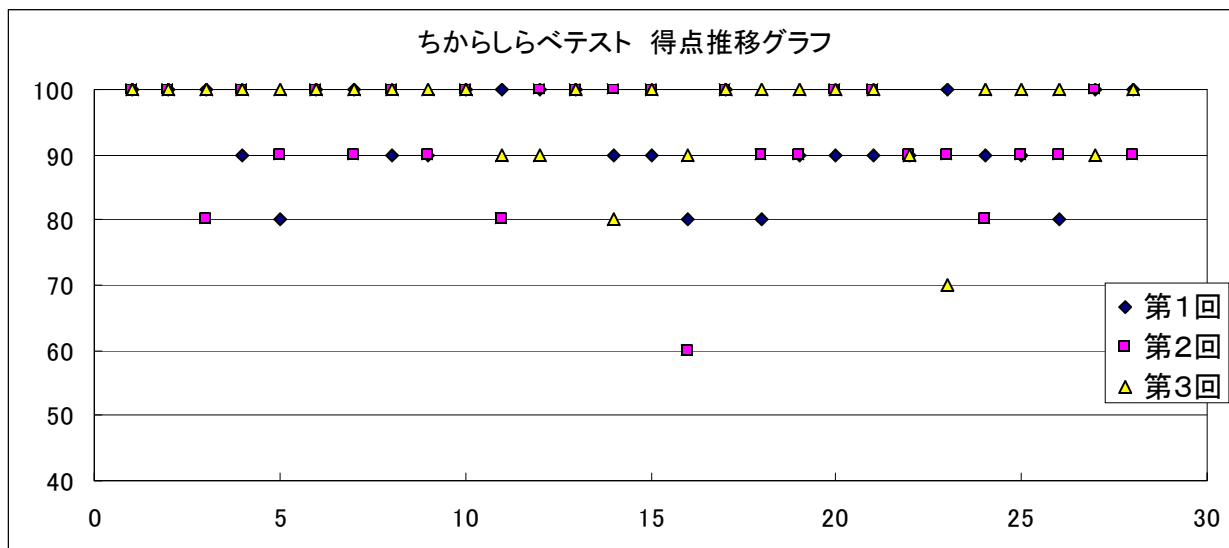
子どもの理解を促進する教材教具の開発は、日々の児童の実態を見ながらたゆまず取り組んでいかなければならない課題である。そのためにも、開発のための時間を生み出す工夫が求められる。また、特別な研究体制ではなく、恒常的な研究を積み重ねていくためにも、時間の応用が大切である。

学力等把握のための学校としての取組

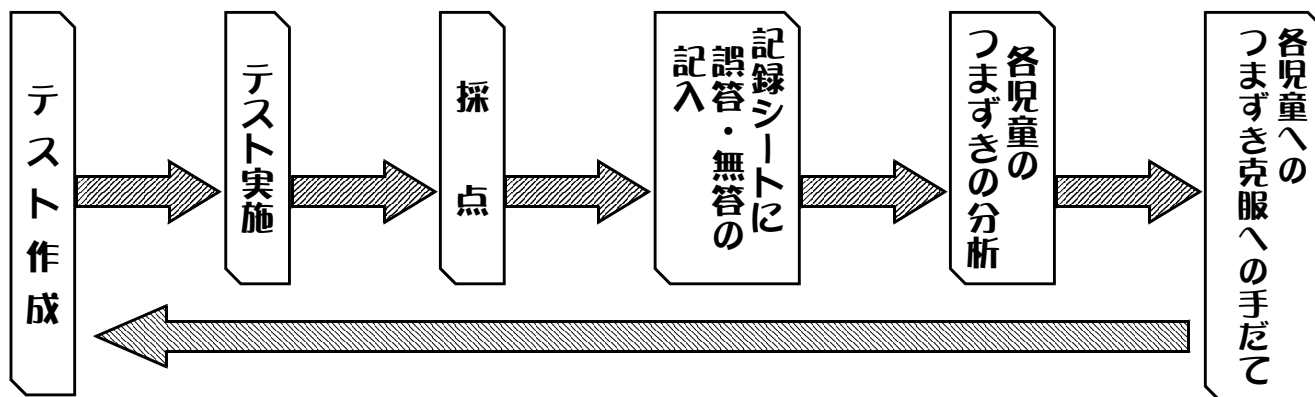
目的・内容・時期

今年度は、算数科の中でも「数と計算」の領域に絞って研究を深めてきた。そのため、児童の計算力の定着を図るため、計算問題に限って2ヶ月毎に調査をし、理解の不十分な児童や学んだ内容が剥落状態にある児童への指導を行ってきた。





ちからしらベテスト 取り組みの流れ ... 2ヶ月に1回の実施



フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成15年12月2日「学力向上フロンティア事業1年次研究発表会」を実施し、公開授業研究発表及び研究協議を行った。また、中間まとめの冊子を作成し、参会者や市内各校に配布をした。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学級規模】	6学級以下	7～12学級		
	13～18学級	19～24学級		
	25学級以上			
【指導体制】	少人数指導	T・Tによる指導		
	一部教科担任制	その他		
【研究教科】	国語	社会	算数	理科
	生活	音楽	図画工作	家庭
	体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	